

北サハリンの西海岸で クロテンの猟師に出会った

さいとう
 齊藤 マサヨシ (写真家)



二〇〇九年八月、私は間宮林蔵の足跡を辿ってサハリンの西海岸を北上した。サハリンの古都アレクサンドルフスクサハリンスキーからヴィアフトウまでの道は、極上のダートでオフロードマニアには垂涎ものだ。

ヴィアフトウから北に道はない。目指すノテト岬（現在のトウイク岬）へは、ヴィアフトウからボートで海岸沿いを北上することになる。四人乗りの小さなゴムボートで、天候を見ながらの航海となる。私は、時化る海が穏やかになるまで、ヴィアフトウに滞在することになった。

私をノテト岬まで案内してくれるのは、エベンキのワロージャで、なかなかの商売上手だ。彼は、北サハリンの西海岸にやって来る外国人のサポートをしている。私の来る一週間前は、幻の魚イトウを釣るために東京から来た日本人を案内して、ヘリコプターも手配した。必要なら用意できるよと自慢げに話してくれた。彼は「夏は観光客の対応を仕事にしているが、冬はクロテン、ヒグマ、キツネなどの猟をしているよ。最高級のクロテンを見るかい」といって毛皮を庭先に並べてくれた。

ワロージャの友だちで猟師仲間なのがウイлтаのサーシャだ。二人は冬になると山スキー（板の裏に毛皮が貼ってある）と食糧を携えてクロテンのいる森の中へ入る。狩猟の腕前はサーシャの方が上のようにだ。

サーシャには左腕がない。右手だけで狩猟するが、狙った獲物は百発百中だ。彼にどうして腕を無くしたのかと聞いたが何も答えず、笑うだけだった。ワロージャがこっそり教えてくれた。「ウオツカを飲みながら猟銃を手入れしていたら暴発して、手が吹き飛んだのさ」。さらに、「おまけに、火薬で家に火がついて丸焼けになってしまった。でも生きているからいいんだよ」と高笑いするのだった。

ワロージャは、祖父の時代から北サハリンで暮らしている。元々大陸にいたエベンキは、帝政ロシア時代に流刑地だったサハリンから脱走しようとする受刑者を見張るためにサハリンの西海岸に移住させられた。脱走者を捕まえると多額の報奨金が貰えるため、彼らは脱走者のことを隠語でクロテンより高価な「シロテン」と呼んでいた。二人はクロテンが棲むという森に案内してくれた。森はどこまでも深く、木々は鬱蒼と繁り、草は光り、足元にはベリーがたわわに実っていた。

〔写真説明〕エベンキのワロージャ（左）とウイлтаのサーシャ（右）は、自分たちが捕獲したクロテンの毛皮を見せて、狩猟の自慢を語ってくれた。二〇〇九年八月、ロシア・サハリン州ヴィアフトウにて撮影。